

この「研究レターHem21オピニオン」は当機構の幹部、シニアフェロー、政策研究プロジェクトリーダー、上級研究員等が研究活動や最近の社会の課題について語るコラム集です。

(「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Institute の略称です。)

発行：(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 研究戦略センター ☎078-262-5713 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸1-5-2(人と防災未来センター)



不安、恐怖、そしてスティグマ： COVID-19がもたらす心理的影響

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 理事兼
兵庫県こころのケアセンター長 加藤 寛

世界的なパンデミックとなった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、いまだ終息の気配が見えず、今後、長い期間にわたって個人そして地域社会にさまざまな影響をもたらすであろう。心理的影響としては、感染に対する不安と恐怖、隔離がもたらすストレス、偏見と差別、情報のもたらす社会不安と混乱だけでなく、長期にわたる社会的活動の制限や経済的損失による負の影響も大きいと予想されている。

不安と恐怖は、誰もが多少かれ少なかれ感じる当然の反応だが、その内容は多様である。感染するのではないかという不安、自分が感染して家族や親しい人に感染させるのではないかという不安、感染したことが知られて誹謗中傷を受けるのではという不安、あるいは大切な人が隔離された場合には引き離されたことによる分離不安などが主な内容で、いずれも了解可能な当然の反応といえるだろう。こうした不安は、時に過激で過剰な行動を引き起こすことがある。たとえばマスク、消毒薬の買い占めはもとより、液体石けん、ティッシュペーパー、そして最近の事案ではうがい薬などが、ドラッグストアの店頭から消えるという馬鹿げた事態が、無責任な発言や報道で引き起こされてしまう。ちなみに、ヨード剤の入ったうがい薬が陽性者を減らすという府知事の発言によって、検査前にしっかりとうがいをする人が増え、本当は陽性なのに一過性に陰性と判断されてしまう偽陰性者が感染を拡大させるという、笑うに笑えない事態が起こらないことを祈っている。

最近のエピソードとして、最後まで感染者が報告されていなかった岩手県で、第1例目になった人への中傷は、聞くに堪えないものだった。批判する人は身近に感染症が来たという不安に駆られているのか、あるいは正義と確信してやっているのだろうか。ネット社会では、誹謗中傷の方法は簡単で、矛先が誰にでも向く

可能性を考えると、背筋が凍ってしまう。

考えてみると、感染症に関するスティグマの問題は、古くは天然痘やペストなどで、持ち込んだと見なされた人々への差別と迫害が世界各地で起きたことが知られている。日本では、結核、ポリオ、ハンセン病などへの差別が20世紀にも続いていたし、1986年に日本で初めて感染者が確認されたエイズ(HIV)では、個人情報曝露されたり、最初の感染者が居住していた松本市のナンバーをつけた車が忌避されるなど、酷い中傷が横行したという。また、2009年の新型インフルエンザ流行の際には、最初に感染が報告された神戸高校と兵庫高校の生徒への中傷が酷く、制服を着て歩けなくなったという。感染症以外でも、原爆被爆者への差別、水俣病やイタイイタイ病など公害病患者への深刻な差別が人々を、ずっと苦しめてきたし、2011年の原発事故が招いた福島県民への言われなき差別は、今でも続く忘れてはならない問題である。

スティグマは当事者を苦しめるだけでなく、当事者自身が「自分は汚れてしまった」「自分は社会から受け入れられない存在なのだ」など、否定的な自己認知をしてしまうことがある。これはセルフスティグマと呼ばれており、うつ病などの精神疾患に発展することもある。こうした被害を防ぐために、われわれは知恵を絞る必要があるだろう。

加藤 寛氏

Profile

1958年生まれ
神戸大学医学部卒業 医学博士
(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構理事兼
兵庫県こころのケアセンター長

インドネシアでの防災教育支援活動 ～継続は力を生んでいるのか～



(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター上級研究員 清野 純史

2004年のインドネシア・スマトラ沖地震で発生した地震被害とインド洋津波による津波被害の調査を行った後の2005年、当時早稲田大学教授の濱田政則先生(現アジア防災センター長・NPO法人国境なき技師団会長)からお声掛け頂き、地震や津波の起こり方、避難の仕方、事前の準備や心構えなど、基礎的ではあるが重要な項目を紹介しながら、バンダアチェの小学校や孤児院を回った。それ以来、京都大学の留学生を含む学生を主体とした京都大学防災教育の会(KIDS)という団体を組織し、彼らの若いパワーや柔軟な考え、行動力を存分に発揮してもらいながら、インドネシアでの防災教育支援活動が続いている。私にとってこの支援活動の原動力は2つある。一つは冒頭の津波で身内を失った子どもたちが暮らしている孤児院での活動の後に、ある少女から受けた言葉『なぜもっと早く私たちに伝えてくれなかったのですか』であり、もう一つは2006年にバンダアチェから招聘した高校生ルマンダ・アディティヨ君の講演中の言葉である。前者は文献1)を参照いただくとして、ここではルマンダ君(通称マンダ)の事について述べる。

マンダは、2004年12月26日当時17歳で、それまでは父母と5人兄弟(兄、姉、マンダ、2人の妹)の家族と一緒に海岸沿いで平穏に暮らしていた。その日の朝7:50ごろ、これ程の大きな地震は経験したことがないという程の揺れに襲われたため、皆家を出て庭に生えているマンゴーの木にしっかり掴まって揺れの収まるのを待った。周囲の村人も皆パニックに陥っていた。10分ほど続いた揺れが収まり、滅茶苦茶になった家の後片づけや、傾いてしまった隣家の手伝いをしていたところ、再度の大きな揺れが起こった。この揺れは長くは続かなかったが、最初の揺れから20-30分後くらいに、近所の人たちが突然大声で「海水があがってきている!海水があがってきている!」と叫んでいるのを聞いた。父親は二人の妹たちを連れ、母と兄、姉、そしてマンダはその後ろを追う形で必死で逃げた。黒褐色で20メートル以上高く上がった巨大な波が後ろに建っている家を飲み込んでいく光景を振り返りながら、間を置かずマンダの身体は真っ黒な水の中に投げ出された。

マンダは泳げなかった。だから大きな瓦礫の固まりの間で浮いたり沈んだりして流され続けた。黒い海水や木材の破片や瓦礫の中で家族のことを思い出し、特にお母さんはどうしているだろうかと思った。疲れ果て目眩がする程だったが、何時間も水の中で頑張り続けてようやく浮いていたバスケットボールを掴まえることができた。何度も何度も海に巻き込まれ流されている人々を見たが、自分一人さえ助けられないのに、まして他の人を助けるなど及びもつかぬことだった。引き波、押し波に翻弄されながら、島影を追ってボールに掴まって足を掻き、やっとのことで瓦礫の山で覆われた海岸にたどり着いた。棒のようになった足を引きずり山を越えてイスラム寄宿舎学校に着いて時計を見たら15:30だった。約7時間も漂流していたことになる。その後、父親がバンダアチェの避難所にいるとのことを聞き、避難所に向かった。呆然として座っていた父親を見つけ出し、泣きながら走って駆けつけ父親を抱き締めた。そこで母と姉と二人の妹が行方不明であることがわかった。結局、マンダの家族は父と兄との3人だけになった。

マンダは、講演の最後にこう語っている。

『時々僕は思います。もし地震後に津波が来ることを知っていたらと——。十分に逃げる時間があったのですから、そしてあのような波に巻き込まれることもなかったのにと。だけど僕等は津波について全く何も知識がありませんでした。だからあのように数多くの犠牲者が出たのだと思います。自然災害についてどのように対応すべきかの勉強や社会啓蒙活動は本当に大事だと考えます。特に僕たちの地元のように災害の多い地域では大切だと思います。僕はいつも災害が再び起こらないように、そして僕らの愛する人々を再び失うことのないようにしたいと祈っています』

爾来、表-1に示すように、これまでの訪尼によるKIDSの教育支援活動は14回を数えた。昨年は残念ながら活動に必要な最低限のメンバー数を確保できずに中止のやむなきに至った。今年は昨年度からのムンタワイ島州政府からの強い要望もあり、昨年の分も補って余りあるほどの活動を行おうと思っている。

この文章を書いている今は、毎年訪れる終戦記念日の時期である。戦争を経験した人々の中には、終戦を境に自分の使命を強く思うようになった方々がたくさんいる。その多くは、亡くなった大勢の仲間の無念を思い、二度とこのような悲惨な戦争を起こさないとというとても強く強い意志である。KIDSメンバーの学生には、インドネシアでの防災教育活動を通して、多少なりとも自己満足に終わらない社会への貢献という芽を植え付けることができればと思っている。そして、このような活動は自分たちの力だけではなく、周りの多くの人たちの支えの上に成り立っていることは必ず伝えていく。戦争体験とは比べるまでもないし、また事の大きさもまるで違うが、果たしてそのような本当に強い意志をもって事に当たっているだろうか、継続は力を生んでいるのだろうかといつも思う。

参考文献1) 濱田・清野・国崎・鈴木:なぜもっと早く私たちに伝えてくれなかったのですか, 土木学会誌, Vol.90, No.5, pp.43-46, 2005.

表-1 2005年から続くインドネシアにおける京都大学防災教育の会(KIDS)の活動

訪問期間	訪問場所	目的
2005.04.12~04.17	バンダアチェ	教育支援
2005.09.11~09.15	メダン, バンダアチェ	教育支援①
2006.09.12~09.19	ジョグジャ, バンダアチェ	教育支援②
2007.08.31~09.07	ジョグジャ, バンダアチェ	教育支援③
2008.08.19~08.30	バンドン, ジョグジャ	教育支援④
2009.09.17~09.30	バンドン, バリ, ジョグジャ	教育支援⑤
2010.09.17~09.29	ジョグジャ, バンドン	教育支援⑥
2011.09.20~09.30	バンドン	教育支援⑦
2012.09.09~09.19	パダン	教育支援⑧
2013.09.12~09.26	スラウェシ島, マナド	教育支援⑨
2014.09.16~09.28	ロンボク島	教育支援⑩
2015.09.15~09.26	ジョグジャ	教育支援⑪
2016.08.28~09.09	パダン	教育支援⑫
2017.09.10~09.17	スラウェシ島, マカッサル	教育支援⑬
2018.08.30~09.07	ベンクル	教育支援⑭
2019.09.08~09.16	必要最小限のメンバーが確保できずに中止	
2020.09(予定)	ムンタワイ島	教育支援⑮

清野 純史 氏

Profile

京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修士課程修了 博士(工学)
京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻教授
(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター上級研究員